

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 27 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K11849

研究課題名（和文）ネット社会におけるインバウンド観光客・定住者を意識した文化伝達の言語表現

研究課題名（英文）Linguistic Expressions of Cultural Traditions Found in Online Communities Aimed in Part for Inbound Tourists and International Residents

研究代表者

平松 裕子（HIRAMATSU, Yuko）

中央大学・経済研究所・客員研究員

研究者番号：30649629

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：観光地に展開される言語景觀に関して、主に日本語及び英語表記を中心に継続的に同一地域の調査を実施した。それにより、変化する要素及び伝統的に引き継がれている要素に関して抽出することができた。英語への誤訳の傾向、言語景觀の展開から見えてくる社会の変化、また観光客に発信する地元店主の意思などが表れていた。

意識的に革新を目指すような作家の文章ではなく、市井の景色の中にまで浸透した表現の中に記者が自覚する以前にも存在する文化的要素が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語景觀調査を通じて、日本文化の特徴的な表現方法などの具体的な展開が明らかになった。それに加え、自動翻訳の課題、特に観光客が文化的地域を訪れた際に、異文化故に適切な翻訳が難しい言葉があること、周囲の景觀の中で掲示される言葉は書籍などの文章翻訳における文脈にあたる部分が周囲の情景であるため、適切な訳語を選びきれない事態が頻出することがわかった。それらを受け、今後の調査区域における研究者らのアプリケーションに説明文の検討や位置情報など情景を加味する必要性を加えることができた。このような検討により、外国人観光客が伝統付き地域を訪問した際の日本文化理解に資するコンテンツ作成の要素がより明らかになった。

研究成果の概要（英文）：We conducted ongoing studies of the linguistic landscapes of the main streets of Nikko and Kobe.

As the results, we found not only accuracy issues such as mistranslations into English, but also that cultural elements are reflected in the messages from the community to tourists in the daily postings. In addition, we observed changes of the linguistic landscapes and thus grasped local tourism through the linguistic landscapes.

Even when tourists walk down the same street, they do not see the same things in the same way. While there are differences in interest based on country and age, the survey results also show that they get different impressions by linguistic landscapes.

研究分野：観光

キーワード：言語景觀 翻訳 文化 観光 インバウンド アプリケーション

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) インバウンドの増加

研究開始当時 2018 年は 2020 年に実施予定であった東京オリンピックを控え、外国人観光客が増加していた。政府のインバウンド観光客誘致の方針も功を奏して海外からの旅行者が増えているだけでなく、YouTube や Instagram を利用した観光情報発信の研究も盛んであった(馬強、2017 他)。

(2) SNS などインターネットを通じた情報拡散の課題

観光地に関して SNS にあふれるほどの写真が投稿されているにもかかわらず、ピンポイントの建造物以外の情報の不足や歴史的情報の不足も見られた。それに対して、地元の商店会などによる文化発信もあったが、日本を訪れる観光客自身による情報の方が数の点で勝り、著名な寺社からの情報発信は届くが、商店主などからの地元の細かな情報は埋もれてしまう傾向が見られた。門前町で暮らす人々の日常生活や日本の習慣などは漏れてしまう可能性がある。

本研究実施の研究者らは地域の商店からの情報 Bluetooth を使用し、観光地を訪問した際にその場で受け取れるアプリケーションを開発した(総務省戦略的情報通信研究開発推進事業(SCOPE)「観光客の満足度向上のための情報提供技術の研究開発」2014~2016 年度及び、科研17H02249 基盤研究(B)・ICTによる観光資源開発支援:心理学的効果を応用した期待感向上2017~2021 年度)が、その過程で、沿道に展開されたアルファベット表記の不統一やコンテンツの中に文化をつなぐ情報の提供が未だ不十分であることに気づいた。

2. 研究の目的

(1) 伝統的文化要素の現在: 言語景観調査及び翻訳課題

SNS の写真中心の情報で興味は文化理解に深まるのか。インバウンド観光客を増やすだけでなく、日本の歴史・文化の深い理解を得てもらうためには、どのように説明したらよいのか。それぞれの母語に翻訳する直訳がゴールではない。それだけでは伝わらない要素がある。現地調査から始め、翻訳状況を確認し、あらためて歴史・文化・言語の本質に立ち返って、伝えるための言語表現を検討するのが本研究の目指すところである。

言語景観とは「道路表示、広告看板、地名表示、店舗表示、官庁の標識などに含まれる可視的な言語の総体」であり、公的表示、私的表示によって成り立っている(バックハウス、2005)。

我々の言語景観調査は主に私的表示、具体的には調査区域に並ぶ店舗の店頭表記を対象にその内容と特に英訳に関して検討を行う。翻訳は発信者の意図のみでは、成り立たない。「2020 年を前にして」と書いた場合、オリンピックが東京で開催されるという理解があって初めてその表現が伝わる。情報受信者が前提を知らなければ翻訳しても相手に内容は伝わらない。伝統的な内容に関してはこの状況がより顕著になる。かといって、情報受信者がわかるような説明さえあればよいでもない。例えば「羊羹」を“Sweet Bean Jelly”と訳しても和菓子店主は納得しない。「羊羹」は「ゼリー」ではないと言う。

伝統的な事物を他言語に翻訳する際は、ズレが生じる。これをどう扱うのか。可視でも課題があり、ましては、不可視の部分を含む文化は理解しにくい。歴史的背景への理解、習慣への理解なしに突きつけられた文化は異物となる。この問題解決のためには、日本人の自らの歴史・文化理解、また受容者としての外国人の持つ文化背景も考慮が必要である。本研究は以上のような課題を持つ異文化コミュニケーションを研究課題とした。

(2) 展開アプリケーションへの翻訳成果の反映

JR 日光駅から世界遺産日光の社寺に続く道筋に設置したビーコンを使用したアプリケーションのコンテンツに上記の翻訳や文化的要素の理解に役立つ成果を入れ込む。

(3) 文化の継承

言語景観調査を実施することでその経年変化を捉え、建造物に代表されるような特別の文化的な遺産ではなく、市井の生活に溶け込んだ文化特性を掴み、それらの継続に資する要素を抽出する。なお、調査に学生が参加することで若年層の文化理解と継承にも益する言語表現に関する実証研究を目的とする。

3. 研究の方法

外国人観光客と地元のコミュニケーションが課題となりうる歴史的地域として日光、その比較対象として神戸に関する言語表現の現地調査を実施する。この2地域は、ともに観光地であるが、地勢、歴史的な位置付けにおいて異なる。墓所であり、伝承・伝統文化が生活に残り湯葉や山椒という伝統的食品を名産とする地域と外国文化との融合が進み、食文化も神戸牛など、欧米にも通用する地域の双方を比較することにより、文化の受容、コミュニケーションの有り様を多角的に把握することが可能となる。観光地調査分析、通訳・翻訳についての理論的検討、ホスピタリティ、異文化コミュニケーションに関して知見を持つ研究者が共同し、相互の文化理解を深

める表現に関して研究を行う。具体的には以下の手順を取る（図1参照）。

(1) 地元（日光・神戸）：
和食文化や文化財の翻訳などからサンプルを抽出し、それがどう表現されているか、言語景観調査を実施する。また、ヒアリング調査を行い、その背景・歴史に関して考察を深める。

(2) 外国人調査
文化理解、情報不足に関するアンケート調査を実施する。（日光、神戸）
以上の調査を実施し、現状の翻訳及び、文化的な理解に関して課題をまとめる。

(3) 通訳・翻訳についての理論的検討

言語の変換に関して自動翻訳も含め、どのような可能性があるのか、あるいはどのような課題があるのかを抽出する。上記(1)(2)の結果を受け、理論面の検討と合わせる。分類検討した結果から具体的な翻訳に関して近似的な文化表現を探す。すなわち、目標言語側で適切な認知の枠組みを喚起できる翻訳、この具体的手法を開発する。

(4) 翻訳を補佐する文化に関する説明の実装

自分と繋がり得る部分があって初めて人はそれに興味を持つ。多くの情報の中から興味のある部分だけを聞き分ける脳の働き（カクテルパーティー効果）にも注目する。知りたいという欲求をもたせる、また、風習も含め生活に根付いた情報を検討する。

4. 研究成果

コロナという予想外の事態が外国人観光客への調査を厳しくしたが、各研究者が海外の言語景観との対比を行い、観光協会担当者からのヒアリングや文書調査も含め精力的に活動を展開した。

(1) 伝統的文化要素の翻訳および文化の継承

日光及び神戸においては2018年から2022年までの経年調査を実施し、その変化や文化的相違に基づく言語景観の状況を調査することができた。揭示内容、またその英訳の現状及び、英訳の正誤のみでなく文化的な相違点、特徴点を具体的に明らかにした。その結果は、認知科学会におけるオーガナイズドセッション、国内外の学会における研究発表において研究者各自が発信した。その内容は、言語景観、特に私的な店舗における揭示内容と英語表示にした際の誤訳の傾向から日本人の英語習得に関するスペルミスの傾向や語順、主語の扱いなど従来から指摘されているものに関して、実際に裏付けるような結果が具体的に見られた。そこから始まって日光の日常にある言葉でも日本では普通であっても翻訳に乗りにくい表現があることを確認した。

また、当初の英訳以外に一部中国語に関して、日光の調査区域において中国人留学生在が調査しその課題を示す論文を執筆した。

当初目的の(3)文化継承のための手法に至る前の課題の明確化に資する研究となった。言語景観調査からは、日光の沿道に展開された揭示にある和菓子の命名や色（例：「青龍」は緑の饅頭の名前であるが、英語圏の観光客（情報受信者）には「Blue Dragon」では意味がわからないのと、美味しくなさそうというコメントもあった。）アジアからの観光客には「四神」を理解する人々もいたが、欧米からの観光客には神の名前の菓子には説明が必要である。また、店舗（情報発信者）側も課題として持っている表現が商店会ヒアリングから具体的には判明した。科学成分としては同じものであっても、酒屋が外国人観光客への酒の説明に「fruity」というと「米は果物ではないからその表現はおかしい」という指摘をされた、陶器店では「蕎麦ちよこ」は上手く訳せないで困るなどである。

一方で「ゆば」が当初「Tofu Skin」と記載されていたのに2022年には多くの店舗で「YUBA」と記載されるようになったのに代表されるように観光客がその土地に関して知るようになると、使用される表現も日本の表記に従ってくる。それを考慮してもまだ、調査結果からは、特徴がある食に関しては翻訳課題が多く上がった。

また、情報発信者と受信者が等価に翻訳できていると考えている場合でも、イメージを調査すると、欧米人と日本を含むアジア圏の一部（中国人・韓国人）では異なった認識を持つことがある。「龍」と「Dragon」がその例である。

1. 来訪者・文化的地域双方への調査

<文化的地域>日光、神戸調査・ヒアリング

A 着地の現状及び課題抽出
外国人観光客とのコミュニケーションに関するヒアリング
メニュー、販売品の翻訳現状調査
B 地域文化要素
文化、習慣に関するヒアリング

<来訪者>外国人観光客アンケート
摂取情報量、興味、現状の不足点

在留外国人ヒアリング調査
日本文化・日常の不便

2. 調査結果の集計分析に基づく分類・類型検討

文化的独自背景

象徴・風習

言語学的再分類
共通認識、固有概念との乖離状況
表現類型の検討

人間生活における一般的要素

3. 文化理解を促す翻訳・説明に関する手法の開発

外国人に想起を促す翻訳、文化説明
→具体的手法の開発

4. 実証的な展開

商店会へのフィードバック・日光仮面ナビへの実装

図1 本研究の検討方法

2019年調査によると、日本人の中でも「龍」の翻訳は“Dragon”で適切と考える人は79人の調査結果の中では63人(79.7%)と多いが、具体的に印象を尋ねると相違点が見える。

(Dragonの印象:n=96, 龍の印象:n=79.)(異なる回答者への調査)「強い」「大きい」は共通しているが、「神聖だ」という項目は「龍」が49.6%と“Dragon”26.0%と比較して明らかに高い。「美しい」の項目も“Dragon”15.6%と比べ「龍」の方が25.3%と高い。図2参照。西洋流の龍は聖書にあるようなサタンの化身という要素のある一方、日光の沿道に展開される龍は神の遣いである。これはしかし誤解として、改めるべきものとするわけではない。人は自分が全く知らないものには興味を抱きにくい。知っている点があると思ったのに、違う、言い換えるとGapがあるものに新奇性を見出す。欧米の外国人観光客の中には沿道の一筆書きの龍を購入する観光客も多い。明治40年発行の『栃木縣營業便覧』の中の調査区域には、観光客相手の飲食店や旅館が並ぶが、このような一筆書きを店の看板商品とした記載は見当たらない。第二次大戦後の商品であり、外国人観光客も「龍」のターゲットであることは商店ヒアリングからもわかる。

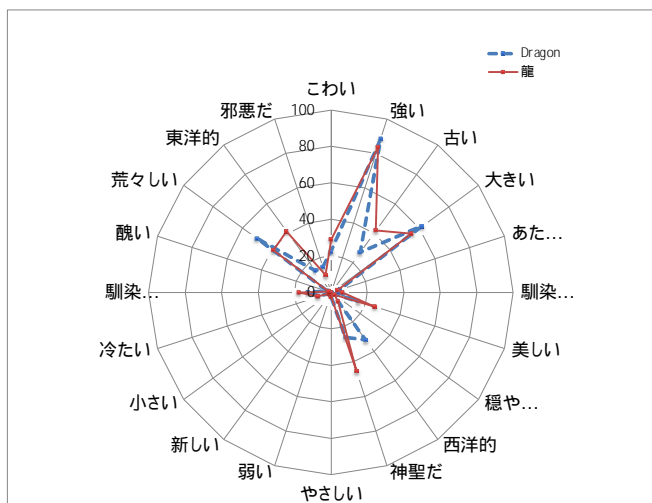


図2 龍とdragonのイメージ調査(%)

人は自分が全く知らないものには興味を抱きにくい。知っている点があると思ったのに、違う、言い換えるとGapがあるものに新奇性を見出す。欧米の外国人観光客の中には沿道の一筆書きの龍を購入する観光客も多い。明治40年発行の『栃木縣營業便覧』の中の調査区域には、観光客相手の飲食店や旅館が並ぶが、このような一筆書きを店の看板商品とした記載は見当たらない。第二次大戦後の商品であり、外国人観光客も「龍」のターゲットであることは商店ヒアリングからもわかる。

言葉のイメージの相違が観光客の興味を誘う。「龍」に関しては、外国人観光客は沿道の先、世界遺産地域で僧侶の説明などから、日本流のDragon/Ryuの新たな捉え方を理解するが、そのような説明がされないような前出の「蕎麦ちよこ」や「fruity」に代表されるような日常の日本的なものの翻訳には課題が残る。言語景観として存在する揭示は長い口頭の説明とは異なり、単語や文節の単位が多いからである。

(2) 展開アプリケーションへの翻訳成果の反映

調査区域に(一社)日光市観光協会の協力を得て研究者たちが既に設置していたビーコンを使用したアプリへの研究成果の反映に関しては、沿道の無電柱化に伴う一時的な設置街灯の入れ替えにより、研究期間中の実施までには至らなかった。今後の反映を目指す。

今回の研究の結果、日常的にある日本的なものに対する説明は沿道の言語景観の中に新しく説明を入れ込むと言うには難しさがあることが確認された。観光客はその来訪目的としてある寺院の僧侶による龍の説明を聴くようには沿道に展開される文章を歩きながら読み込むとは限らない。またスペースも店頭では限られている。したがって、観光客が持つスマートフォンのアプリケーション上に説明にたどり着くような部分を入れ込むことの必要性を改めて確認した。

一方で、調査の中でスマートフォンを利用した自動翻訳からみた実際の街頭における翻訳の限界を知り、論文発表も行った。沿道の表示(言語景観)は書籍などの文章の翻訳とは異なり、多様な修飾語を含まず、その代わりに設置箇所、その周りの情景を文脈のようにとらえることで初めて正確な翻訳が可能となる。沿道に展開される短い表示の翻訳にはその表示の場所も多様な意味の中からその場にあった訳語を選択する1要素とする必要があること、自動翻訳にはのりきらない文化的要素も世界遺産地域への道という伝統的地域における調査の中で目立ってみられた。

以上のように、多言語化したアプリの英訳部分には、位置情報とのリンク、また色や伝統文化が関わる語句についての説明パートなど、今後、展開中のビーコンアプリの英語訳のページへの反映の際に留意すべき点であることが明らかになった。これが当初予定以外の大きな成果である。

<引用文献>

- 馬強,「観光情報学の最前線 -観光の分散化と個人化を促進する集合知活用情報技術」, 情報処理 58 220-2017, 2017
- ペーター・バックハウス “日本の多言語景観”, 真田信治・庄司博史(編) “事典 日本の多言語社会”, pp53-56, 岩波書店, 東京, 2005.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Yuko Hiramatsu, Atsushi Ito, Akira Sasaki, Kazutaka Ueda et al	4. 巻 1
2. 論文標題 A Survey to Create Attractive Contents for Tourism -To Comprehend Other Cultures-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Computer Aided Systems Theory: EUROCAST 2019	6. 最初と最後の頁 pp.407-415
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-3-030-45096-0_50	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 平松 裕子・伊藤 篤	4. 巻 61
2. 論文標題 日光を舞台とした興味を誘発するアプリケーションの開発及び調査研究：情報化社会における新奇性欲求の追求	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 経済学論纂(中央大学)	6. 最初と最後の頁 231-250
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 坪田康・森下美和・原田康也・平松裕子・佐良木昌	4. 巻 122
2. 論文標題 スキャン翻訳を通じた言語景観・言語理解（英語編）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術報告（信学技報）	6. 最初と最後の頁 46-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 平松裕子・森下美和・原田康也・伊藤篤・佐良木昌	4. 巻 121
2. 論文標題 観光地日光における言語景観：継承と変容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術報告（信学技報）	6. 最初と最後の頁 56-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川上晴人・中山春佳・平松裕子・伊藤篤・長谷川まどか・原田康也・上田一貴・佐々木陽・森下美和・佐藤美恵	4. 巻 121
2. 論文標題 日光観光案内アプリのマルチメディアコンテンツの構成に関する検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術報告（信学技報）	6. 最初と最後の頁 25-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平松裕子	4. 巻 122
2. 論文標題 言語景観の語りかける先ニューヨークにおける調査より-Youを中心に-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術報告（信学技報）	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Hiramatsu, Atsushi Ito, Miki Kakui, Yasuo Kakui	4. 巻 11590
2. 論文標題 Case Studies of Applications to Encourage Students in Cyber-Physical Environment	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Learning and Collaboration Technologies. Designing Learning Experiences	6. 最初と最後の頁 357-369
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-3-030-21814-0_27	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計36件（うち招待講演 6件／うち国際学会 8件）

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 台湾の意味景観調査に向けて
3. 学会等名 日本認知科学会第39回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Morishita, M., & Harada, Y.
2. 発表標題 Linguistic landscapes in Japan and Australia and how language learners perceive them
3. 学会等名 the 57th RELC International Conference: Rethinking English Language Teaching and Learning for a COVID-19 Endemic World: (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Morishita, M., & Harada, Y.
2. 発表標題 Use and misuse of non-Japanese found in linguistic landscapes in Japan
3. 学会等名 the 9th International Conference on Intercultural Pragmatics and Communication (INPRA2020), (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Atsushi Ito, Akira Sasaki, Munkhod Bayarsaikhan, Hiroyuki Hatano, Yuko Hiramatsu, Fumihiro Sat
2. 発表標題 A Study on Navigation System Using BLE Beacon for Sightseeing
3. 学会等名 IEEE 23rd International Conference on Intelligent Engineering Systems (INES) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 台湾の意味景観調査に向けて
3. 学会等名 認知科学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yasunari Harada
2. 発表標題 Semiotic and Cognitive Interactions in Cyberspace Considered as Heterotopia: Cultural Appropriations, Aggressions and Conflicts," ERL V Conference 2022: linguistic well-being (before, during, and after the pandemic), International Association for the Educational Role of Language
3. 学会等名 ERL Association - ERLA (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuko Hiramatsu, Atsushi Ito, Akira Sasaki
2. 発表標題 Developing an Application in the Forest for New Tourism Post COVID-19 -Experiments in Oku-Nikko National Park-
3. 学会等名 EUROCAST2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平松裕子
2. 発表標題 日光の言語景観に見られる文化的要素の表出と観光客の受容 ～ 見立ての手法 ～
3. 学会等名 電子情報通信学会技術報告 (信学技報)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平松裕子・森下美和・原田康也・伊藤篤・佐良木昌
2. 発表標題 観光地日光における言語景観 継承と変容
3. 学会等名 電子情報通信学会技術報告 (信学技報)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平松裕子
2. 発表標題 「見立て」の成立:文化地域における発信者(日光店主)と受信者(観光客)間のコミュニケーション
3. 学会等名 日本認知科学会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平松裕子
2. 発表標題 港神戸と門前町日光:言語景観調査から見える相違に関する一考
3. 学会等名 第184回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平松裕子
2. 発表標題 日光の言語景観調査の紹介
3. 学会等名 第177回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤篤・芝原暁彦・原田康也・平松裕子・森下美和
2. 発表標題 日光の観光開発と高精細3Dプロジェクト・マッピング
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 神戸における外国人居住地域の言語景観
3. 学会等名 日本認知科学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤篤
2. 発表標題 ICTによる旅行の安心安全：スマホアプリによる支援のありかた
3. 学会等名 日本認知科学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原田康也
2. 発表標題 情報環境(言語景観・意味景観)とのインタラクション -- 多層的異文化コミュニケーションの危険な曲がり角 --
3. 学会等名 日本認知科学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐良木昌
2. 発表標題 言語表現と認知機序との間隙
3. 学会等名 日本認知科学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐良木昌
2. 発表標題 英語条件表現の諸相
3. 学会等名 電子情報通信学会技術報告 (信学技報)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原田康也
2. 発表標題 電脳空間 (ヘテロトピア) における多文化接触: 約束の『知』に『虚実の相克』のあらんことを
3. 学会等名 電子情報通信学会技術報告 (信学技報)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Atsushi Ito, Yosuke Nakamura, Yuko Hiramatsu, Tomoya Kitani, Hiroyuki Hatano
2. 発表標題 Developing an Error Map for Cognitive Navigation System
3. 学会等名 frontiers in Computer Science (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 日本の言語景観における英語の誤用傾向
3. 学会等名 言語学習と教育言語学
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 海外での言語景観調査に向けて
3. 学会等名 第184回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 言語景観とピクトグラム
3. 学会等名 電子情報通信学会技術報告（信学技報）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuko Hiramatsu
2. 発表標題 SURVEYS ABOUT LOCAL TRADITIONAL OBJECTS IN NIKKO, THE WORLD HERITAGE SITE - INTERCULTURAL CONTACTS AND UNDERSTANDING OTHER CULTURES
3. 学会等名 12th International Conference on Education and New Learning Technologies Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 観光都市の言語景観：神戸から海外へ
3. 学会等名 電子情報通信学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植野一瑛・川南莉奈・渋谷真里・辻咲菜恵・矢嶋駿也・矢田優芽夏・森下美和
2. 発表標題 外国人居留地の言語景観
3. 学会等名 第175 回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原田康也・森下美和,
2. 発表標題 映像作品に見る香港・澳門・新嘉坡・東京の言語景観：二つまたは三つの観察と考察」
3. 学会等名 日本ビジネスコミュニケーション学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 傳翔・康名澁・伊藤篤・平松裕子・原田康也・羽多野裕之・上田一貴・佐藤文博・森下美和,
2. 発表標題 AI ご当地観光ナビアプリの研究開発
3. 学会等名 日本認知科学会第36回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐良木昌
2. 発表標題 芸術の中心点パトスと言語表現
3. 学会等名 日本認知科学会第36回
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平松 裕子
2. 発表標題 日光の言語景観とインバウンド観光客のインタラクション 文化と伝統を超えて
3. 学会等名 日本認知科学会第36回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuko Hiramatsu and Miwa Morishita
2. 発表標題 Linguistic Landscapes in Nikko and Kobe
3. 学会等名 The 28th Joint Workshop on Linguistics and Language Processing（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平松裕子
2. 発表標題 日光の沿道における言語景観の調査研究から見える 文化交流の可能性と課題
3. 学会等名 日本認知科学会第35回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 傅翔、康茗淞、張昭誼、伊藤篤、平松裕子、原田康也、佐々木陽、羽多野裕之
2. 発表標題 観光地における中国語表記の課題
3. 学会等名 日本認知科学会第35回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐良木昌
2. 発表標題 認知機序と5W表現順序との言語間相違
3. 学会等名 電子情報通信学会総合大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田 康也, 森下 美和, 平松 裕子, 福留 奈美, 佐良木 昌
2. 発表標題 食文化の固有性・共通性から考える翻訳可能性
3. 学会等名 日本認知科学会第35回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森下美和・平松裕子・原田康也
2. 発表標題 神戸の言語景観 ～ その特徴と歴史的背景 ～
3. 学会等名 電子情報通信学会思考と言語研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 伊藤篤編著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央大学出版部	5. 総ページ数 248
3. 書名 教育とICT	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐良木 昌 (Saraki Masashi) (20770960)	明治大学・研究・知財戦略機構(駿河台)・研究推進員 (32682)	
研究分担者	原田 康也 (Harada Yasunari) (80189711)	早稲田大学・法学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	森下 美和 (Morishita Miwa) (90512286)	神戸学院大学・グローバル・コミュニケーション学部・准教授 (34509)	
研究分担者	伊藤 篤 (Ito Atsushi) (80500074)	中央大学・経済学部・教授 (32641)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関